



▲吉川町奥谷には、「上田桑鳩先生
生誕地」の石碑が建てられている。

三木市出身の書家・上田桑鳩

書の世界を生きた桑鳩、
本名「順」。

上田桑鳩は、1899（明治32）年
5月11日に、美濃郡奥吉川村奥谷（現
在の三木市吉川町奥谷）で、父・藤田
石太郎、母・このの三男として生ま
れ、「順」と名付けられました。

吉川高等小学校を経て三田中学
（現在の三田学園）に在学中、美術に
興味を持ち美術学校を志望していま
したが、奥吉川銀行の頭取などを務
めた父が銀行業務の破綻の責任を重
く受けとめ早くに他界し、家計は貧
しくなりました。順は父の葬儀で亡
き父の無念を晴らすことを誓い、そ

の姿を見た参列者は胸をつたれたと
います。

順は、20歳のときに宝塚町の上田
亀蔵と養子縁組し、亀蔵の娘・りんと
結婚し、上田姓となりました。その
後、自身の雅号を当時居住していた
紅葉谷にちなんで「錦谷」としました。

家業に従事するため、美術の学校
に通えなかった順は、自宅でできる
書道の稽古を始めました。習うなら
一流の先生から学びたいと考え、「近
代書道の父」といわれた日下部鳴鶴
の門下生である井原雲涯、近藤雪竹
に指導を受けました。

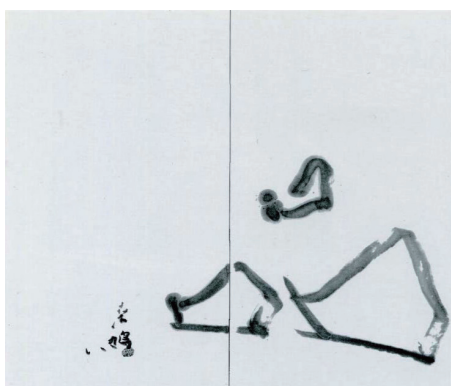
書を専門に生きる志を抱いて上京
したのは28歳のころ。順の書に対す
るひたむきな姿勢とその才能は弟子
を取らないことで有名な「現代書道
の父」比田井天来をも動かし、順は
天来の弟子となりました。天来のも
とで、順はひたすら先人の書いた文
字を手本に書き写す臨書を行いました。
短期間で筆が使用できなくなる
ほど、毎日毎日書きました。

その努力は大きく実り、31歳のと

きに、当時日本で有数の書道展覧会
「泰東書道院展」で文部大臣賞に輝
き、書道界に華々しくデビューしま
した。この頃、雅号を「錦谷」から「桑
鳩」に改めました。

泰東書道院展での受賞に始まり、
多くの展覧会でも賞をもらった桑鳩
は、書道の会を結成するとともに、
雑誌を発行するなど、たくさんの活
動場所と仲間、弟子を持つことにな
りました。

とどまることのない情熱と
夢が生み出した「前衛書」



▲第7回日本美術展覧会（日展）に出品さ
れた作品「愛」【奎星会提供】

当時、書道はきれいで読みやすい
字を書くためのものという伝統的な
考えが大勢を占めていましたが、桑
鳩は「現代に生きる我々には、現代

三木市出身の書家・上田桑鳩は、前衛書の先駆者として、偉大な業績を
残しました。

作品の一つである「日本経済新聞」の題字は今も使用され、三木市にお
いても「三木市役所」の門札をはじめ多くの作品を残されています。

また、毎年10月に約8千点の書道作品を展示する「みなぎの書道展」は、
桑鳩を称えるために始まり、現在も吉川の地で開催し続けています。

ここでは、市制施行70周年記念事業として開催する「上田桑鳩展」を前
に、書の新天地を樹立した書家の姿に迫ります。

問（市）文化・スポーツ課 文化芸術係



▲墨の代わりに絵の具を用いた
彩色作品「鳳凰」

の書がなければならぬ。それを生
み出す必要がある」と考えていまし
た。古典など、過去に書かれた文字
を基本にしながら、筆を心のままに
動かして書いた文字で心を表現する
ことを「書芸術」と位置づけ、そして
生まれたのが「前衛書」と呼ばれるも
のでした。

1951（昭和26）年、第7回日本
美術展覧会（日展）に「愛」を出品。こ
の一見「品」とも読める作品の題名を
きつかけとして、論争が巻き起こり
ました。孫の愛らしい姿をイメージ
に制作されたこの作品は、革新的な
発想から生まれたものの、旧来の常
識から大きく外れるものだったから
です。

4年後、桑鳩は日展を脱退し、芸
術家として前衛書の名のもとに、多
くの作品を生み出しました。

三木市制施行70周年記念事業

上田桑鳩展

みき歴史資料館 企画展

7月27日(土)～9月29日(日)

午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

～書の流れ儀～

上田桑鳩が市内の小中学校へ寄贈した作品を中心に三木市との関わりを紹介します。文机、旅行鞆などの愛蔵品、写真、書簡などを通じて人物像に迫ります。



■ 特別講演会 上田桑鳩の魅力

- ▶日 時 9月7日(土) 午後1時～2時30分
- ▶会 場 みき歴史資料館
- ▶講 師 奎星会 会長 中原志軒さん
- ▶定 員 先着70名
- ▶申込方法 以下へ電話で申し込んでください。
- 問・申込 堀光美術館 ☎82-9945

堀光美術館 特別企画展

8月30日(金)～9月29日(日)

午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

～上田家・飛雲会・上垣家寄贈作品～

未公開作品はじめ、日本最大の桑鳩コレクション展の集大成として展示します。

- ▶入館料※ 一般500円(250円)、
大学・高校生 250円(120円)、中学生以下 無料
()内は20人以上の団体料金
- ※65歳以上、身体障害者手帳など、各種手帳を
所有の方およびその介護者は半額

■ ギャラリートーク

- ▶日 時 9月7日(土) 午後3時～4時
- ▶会 場 堀光美術館
- ▶講 師 奎星会 会長 中原志軒さん
飛雲会 会長 牛丸好一さん
市美術協会 顧問 公森仁さん
- ▶定 員 先着30名
- ▶申込方法 以下へ電話で申し込んでください。
- 問・申込 堀光美術館 ☎82-9945

第40回 みなぎの書道展

作品募集

- ▶応募資格 県内在住・在学の幼児～高校生
- ▶募集内容 ・毛筆のみ、字句・書体は自由
・白無地の半紙に縦書き
・1人1点(未発表の作品)
- ▶募集期間 8月21日(水)～9月5日(木) (当日必着厳守)
- ▶申込方法 原則、園・学校で取りまとめて、吉川支所市民生活課へ提出してください。

墨華香るまちフェスティバル

問(市)文化・スポーツ課 文化芸術係

展示

- ▶期 間 10月5日(土)～13日(日)
(9日は休館)
- ▶会 場 吉川総合公園
パストラルホール
- ▶表彰式 10月13日(日)
吉川総合公園 研修館

多方面で表現の才能を発揮
しつづける桑鳩



▲海外で書の実演を披露する桑鳩

桑鳩は作品制作に精力を注ぎますがその一方で、日本各地を巡り市民講座を開催したり、小・中学校や高等学校の教科書や多くの本を出版し、誰もが身近でわかりやすく書道が学べるような環境づくりにも努めました。また、桑鳩の活動は海外にもおよび、アメリカやドイツなどで書の展示会や実演を行い、日本の文化である書の素晴らしさを世界にもアピールしていきました。

書の入門書に掲載された上田桑鳩の作品と「前衛書とは」の解説



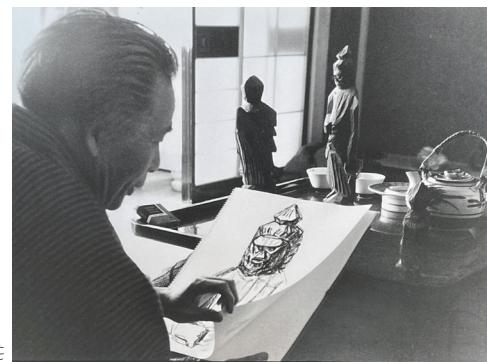
▲上田桑鳩「『恐怖』幽」(1957年)
【宮崎県立美術館蔵】

前衛書とは

前衛書というのはもともと最先端の書という意味。現在では、黒い墨を使つてわけのわからない字を一字か数文字書いたものを前衛書とか墨象と呼んでいる場合が多いようです。前衛書というものが、「読めない」とか「激しい」とか「字である」とかいう書のイメージと結びついた、これまたおかしい分類です。けれども、現在では、本当に自分が書きたいものを表現する場合に、必ずしも読めるような状態で仕上がるとは限らない。多少読みにくくなくても、読めるように書かれた時と何が違う表情がでて、絵的な美を構成している場合、何となくひかれることはあるものです。試みてみると意外に面白い展開があるかもしれません。しかし、書は言葉の芸術であることをくれぐれも忘れぬように。

▲出典：墨10月臨時増刊「書」を書くための
基本ハンドブック／編集・執筆：石川九楊
発行：芸術新聞社 P151から引用

次に陶芸です。粘りを持つ立杭の土を愛し、陶板や茶碗、皿などに盛んに書作品を書き残しました。中でも陶磁器の表面に施すガラス質の被膜「釉薬」の研究は本職を超えるほどの境地になり、見事な色彩の作品を



▲江戸時代の修行僧・円空上人が彫った一刀彫の仏像をスケッチする桑鳩

残しています。そして探石です。石の形の面白さ、色彩の多彩さに心を惹かれ、旅行先の道端や川原などで石を集め、自宅に持ち帰り丹精込めて磨き上げ、アトリエ内や庭などあらゆるところに置いて鑑賞していたそうです。



▲陶皿(すえざら)

を深めることにより、自らの書作品の幅を広げ、進化発展させようとの思いがあったと考えられています。1968(昭和43)年9月4日、桑鳩は病のため家族や弟子に看取られながら亡くなりました。69歳でした。桑鳩の一生は「書芸術」の開拓をめざし、現状に満足せず常に理想を求め研究や工夫を重ねる努力をしました。いったい桑鳩は生涯どのくらいの文字を書いたのでしょうか。その数は計り知れません。反面、書に厳しく人にやさしい人柄は多くの人たちからとても愛されました。伝統を踏襲してきた書道に芸術性を見出す「前衛書」の道を切り開いた桑鳩はまさに書芸術の先駆者です。